

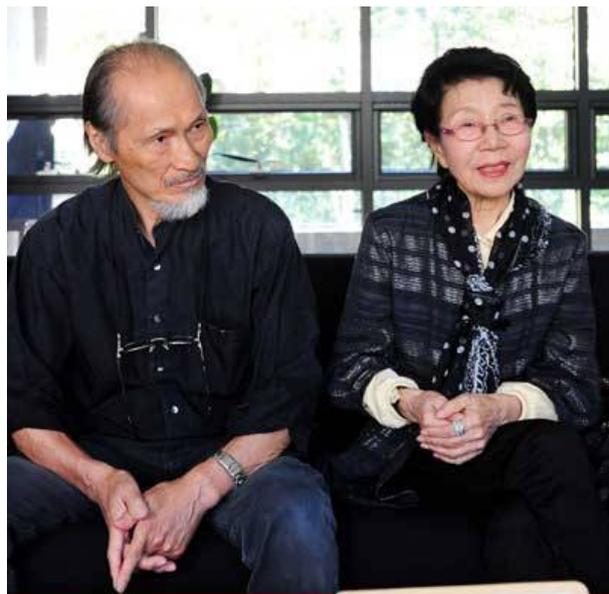
## “観客の想像力を引き出すようにするには、セリフのある演技以上に多くのエネルギーが必要”

沈黙劇“砂の駅”に出演する元老俳優、ペク・ソンヒと品川徹

世界国立劇場フェスティバル参加作品

“社会的存在としてのみ強調されてきた人間を、演劇の舞台上で生命的存在として表現”

ソヨン記者 [jollylife@hk.co.kr](mailto:jollylife@hk.co.kr) ◆ト%δ◆ : 2011.10.04 20:16:07 ◆◆◆◆◆δ◆ : 2011.10.04 23:59:54 記者 bwh3140@hk.co.kr



ペク・ソンヒ(右)は“国内では70代の俳優の年輪の演技に接する機会が多くない”とし、品川徹を“宝石のような客”と喜んだ。

歳を重ね年輪のように積み重ねてきた演劇人生が作る共感の力は、魔法のようにも見えた。今回日韓両国の元老俳優が顔を合わせたのは初めてだったが、まるで古い友人に出会ったような打ち解けた雰囲気だった。世界国立劇場フェスティバル参加作品として、7,8日に国立劇場 KB ハヌル劇場で公演される日韓共同制作演劇“砂の駅”の出演を控えて、元老俳優ペク・ソンヒ(86)と品川徹(76)に芝居の稽古場、ソウルムンレ芸術工房で会った。

「お互いに演劇魂に通じる芸術家、またはそれ以上の芸術の塊に交感することができ、親近感を感じた」両国の巨匠の相手演技者に対する感触は、口を合わせたかのようにまったく同じだった。

今回の出会いは、『砂の駅』のような沈黙劇を着実に韓国に紹介してきた演出家キム・アラによって可能となった。「今年の春に脳卒中で倒れ、緊急治療室に運ばれて、やっとの思いで生き返りました。アラ氏の出演依頼に最初はできないと断ったら、「先生、何十年も演劇をして韓国最高峰だと言われ、体が悪いからってそのまま寝て死ぬのを待つのか?」と言われ、その言葉がとてもありがたかった。それでセリフを覚えられないと心配したら、「セリフはないと言われたの(笑)」

「地獄を経験し、今の人生はおまけ」というペク・ソンヒの健康状態を知らなかった品川徹は、舞台に立つことにした先輩の決意に驚き、相手役ではないけれど、こうして一緒に共演することになった今回の舞台が嬉しかった。「大俳優のすばらしい部分を盗んで学んで日本に帰る」、という品川の言葉にペク・ソンヒは、「美しく歳を重ねる俳優と今回一度だけでなく、もっとたくさん一緒に舞台に立ちたい」と答えた。「私に髭がなかったら、多分4歳は若く見えるでしょ?」先輩に向かって話す70代の日本の老俳優の口ぶりは、甘えん坊のようだった。

今回の演劇は、セリフなしで、極端なまでの遅い動きで微妙な日常の感性を表現して哲学的なメッセージを伝える、日本の劇作家兼演出家の太田省吾の作品だ。様々な旅人が砂場に登場して、出会い、愛し、別れる過程を描きながら、人間の生と死、存在の意味について問いかける。ペク・ソンヒは、若い女性を見て

<韓国日報 2011年10月5日掲載>

過去を回想する老女で、品川徹は夢の中で少年時代に返り心に描いていた少女に出会う老人として登場する。

1988年に太田の『水の駅』の出演のために訪韓したことがある品川にとって、このような沈黙劇は特別な意味がある。「スピードを重要視する時代なので、社会はもちろん、演劇でも遅いことに否定的な認識を持つ人が多いですが、ゆっくりと移動する過程で、以前に見えなかった人間の存在の他の部分が明らかになることができます。沈黙していても、私の中に言葉がないわけではない。」

彼は、太田省吾の言葉を借りて、「人間が生きるということは、家族関係の中にあったり、会社に勤めたりする社会的存在価値だけが浮き彫りにされる傾向にある。演劇も生命の存在としての人間を表現することを見過ごしてきた」と話した。

演劇にはクォク・ソンドク、パク・チョンジャ、ナム・ミョンニョル、大杉漣など、両国を代表する俳優たちが出演するが、この様な独特な作品なので観客の反応が心配だ。演劇だけではなく、“白い巨塔”などの映画やTVでも活躍してきた品川でも、「どうすれば観客が眠ったり途中で席を離れることなく、最後まで見てもらえるか工夫中」とし、「観客の想像力を引き出すには、セリフのある演技をする時よりも、もっと多くのエネルギーが必要だ」と述べた。

<著作権者©インターネット韓国日報、無断転載を禁じます>